



ともに

園長 野中 泉

昨年の4月は、アトムは盛大な泣き声とはじけるような笑い声に溢れていました。でも今年の春は、1年前には、いえほんの数ヶ月前まででは、想像もしなかったアトムです。

新年度になってから、ほとんど通常保育ができていないため、アトムっ子にクラスの様子を書くことは難しいと、早々に「メッセージ」集にすることは決めたのですが、いざ書きはじめると、職員たちは、これも難しいと頭を抱えました。「先が見えない今、何を言えばいいのか」「正直な気持ちを伝えたいのに、文章にしたらきれいごとになってしまう」。職員の戸惑いと苦悩は、私自身の胸のうちとも重なります。先が見えない緊張感の中で保育園を開き続ける毎日。「大丈夫、アトムに預けていいよ」と「お願いだから、休んで」の矛盾する言葉を交互に口に出し続ける葛藤だらけの日々、私こそ、今ここに書くべきことは、何なのか自分を整理しきれずにいます。

そんな中、ふと、思い出すことがありました。福井にいた頃、仲間や先輩たちが長年「チャイルドライン」というフリーダイヤルで子どもたちからのSOSを受ける活動をしていたのですが、そのご縁で出会ったある先生（長年他県で『命の電話』の活動をされていた）がこんなことを言われました。「実はね、先生という名前のつく人たちは受け手としてダメな人が多いんですよ。かかってきた電話に正しいことを言って、導こうとしすぎちゃうの。でもね、命のギリギリの崖っぷちの人が求めている言葉はそんなことじゃないんですよ。実際、自殺をしようとする直前で電話をしてきた女性が、受け手ボランティアが、ただひとこと「それは、悲しいね」とだけ言って後は、言葉もなく一緒に泣いてくれたことで自殺を思い留まったということもあったんですよ」。

アトムにいと「こんな今」でも、いえ「こんな今」だからこそ、「ねえ、聞いて」と保護者から声をかけられることが少なくありません。「仕事を休ませてほしいって言ったら、皆がんばってるのにお前だけ休むのかって上司に言われた」「保育園に預けていることが、罪悪感。つらい」「毎朝戦場（病院勤務）に行くみたいな気持ちで、子どもと別れてる」「子どもとしか、しゃべってない。ストレスで子どもに優しくできない」「私が働かないと、明日食べられない」「夫とけんかばかりしてる」。

集えない、語り合えないとわかっていても、アトムのテラスで、事務室の窓でふと立ち止まってしまうお母さんたちの気持ち。休み連絡の電話の向こう側で、ついこぼれてしまう言葉。聞く度に、居ても立ってもいられない思いにかられるのに、やっぱり私にはみんなを励ます「うまい言葉」が出てきません。「しんどいな」とか「がんばろうな」と、言いながらもなんだか自分の言葉がとっても「きれいごと」に聞こえたり「無責任」に思えたりして、自分の無力さが嫌になります。

でも、だからこそ、今無力だった自分を、きれいごとにはせず、ちゃんとまるごと覚えておこうと思っています。今の整理できない辛さや、葛藤を覚えておこうと思います。そして、きっと、いつか一緒に「あのとき」こんな思いを抱えながら、あなたも、私も毎日とむきあっていたねと、みんな語り合いたい。そう心から願っています。